



最新の系統学研究を反映 多数の新記録種を掲載 日本産鳥類に関する基礎文献 「日本鳥類目録」の改訂第8版を刊行します

日本鳥学会では、日本鳥学会大会 2024 年度大会（9月13～15日、東京大学農学部キャンパス；9月16日、中央大学後楽園キャンパス）にあわせて「日本鳥類目録」改訂第8版を刊行します。

● DNA を用いた分子系統学研究の結果を反映

第7版において、DNA を用いた分子系統学的研究の結果を大幅に取り入れた改訂を行いました。その後もういった研究成果が引き続き出ていることから、今回の改訂でもそのような成果を取り入れた改訂を行いました。さらに国内の分布状況と記録状況について入念に情報収集と検討を行い、改訂に反映しました。

● パブリックコメントの実施

今回の改訂で特筆すべき点は、1) これまでどおり地域協力者の助力を得るだけでなく、さらに情報を広く集めるための新たな試みとして2回のパブリックコメントをおこなったこと、2) 利便性を重視して世界の標準的な分類に合わせると共に日本が責任をもつべき分類群については研究の現状に合わせて独自の分類を残したこと（特に、キジを日本固有種とするなど種の境界を大きく見直したこと）、3) 本州・四国・九州については必要な場合は都府県単位で北海道は4地域に分割して記録を示したこと、4) 海鳥について周辺海域を10の海域に分けて海洋分布を示したことがあります。

● 24目83科280属644種を収録

野鳥観察人口の増加や撮影機材の性能向上によって、



キジ（キジ目キジ科）（撮影：平岡考）

日本に分布し、日本の国鳥である、体が緑色のキジは、目録第7版(2012)まで、大陸に分布し、体が赤銅色で多く白い首環のあるキジと同種として分類されていました。目録第8版では、日本産のものをキジとして、大陸産のものをタイリクキジとして互いに独立の種として扱うことになりました。その結果、日本固有種が1種増えました。

鳥類目録

鳥類学が盛んな多くの国では、それぞれの国の鳥学会が、国内で記録されたすべての鳥類を列挙し、それぞれの分類上の位置づけを明かにし、生息状況を記した鳥類目録を出版しています。この鳥類目録はその国の鳥類に関する基礎的文献であり、その分類が、行政や教育、出版などに反映され、市販の図鑑類も多くの場合この目録に準拠して作られます。

「日本鳥類目録」は、1922年に日本鳥学会創立10周年を記念して初版が出版された後、改訂を重ねて、これまでの最新のものは2012年に出版された第7版でした。

日本鳥学会

日本鳥学会は日本最大の鳥類学研究者団体です。1912（明治45）年、飯島魁（いじま・いさお）東京帝国大学理科大学（現在の東京大学理学部）教授を初代会頭として発足しました。創立当時の会員数は20名未満でしたが、現在はプロの研究者からアマチュアまで、1200名を超える会員を擁するまでに発展しました。

近年、従来は日本産と考えられていなかった多くの種の渡来が確認されるようになりました。今回の改訂では、論文で報告されたり、識別可能な写真が印刷物に掲載された多数の新記録種、亜種を掲載しています。一方で、第7版で本文に掲載した種でも、再検討の結果、飼育個体の逸出か自然分布かが判定できないと判断されたものや、観察情報が不十分で同定のためにさらに調査が必要と判断されたもの等は、第8版では目録本文への掲載を見送った種もあります。自然分布する鳥の掲載種数は、2012年に発行された第7版の24目81科260属633種に対し、24目83科280属644種となりました。

2024年9月12日
日本鳥学会報道発表 P.2

※「日本鳥類目録」改訂第8版は、日本鳥学会大会2024年度大会会場(9月13～15日、東京大学農学部キャンパス;9月16日、中央大学後楽園キャンパス)で9月13日から販売します。大会終了後は、日本鳥学会の事務所で販売の予定ですが、これについては、決定次第、日本鳥学会のウェブサイトでご案内いたします。

※このプレスリリースで使用了画像をデジタルデータで提供します。右欄の連絡先にご連絡ください。

本件についてのお問い合わせ先
(公財)山階鳥類研究所 広報担当
日本鳥学会目録編集委員 平岡考
電話:04-7182-1101 FAX:04-7182-1106